空襲

平和の時代がきた

澁谷榮一
新井二丁目

兵隊さんがかわいそうだ…

ものごころがついた頃は大日本帝国陸軍が旭日（きょくじつ）の勢いを備蓄していた、丁度そんな時だったのだろう。中野駅には軍服でない青々とした刈ったばかりの坊主頭の人が電信隊の方に行くのをよく見掛けたし、新宿に行くと、駅のドームは、出征兵士を送る「勝って来るぞと勇ましく…」の楽隊のリズムにあわせて、日の丸の旗が波打っていた。母は人々をかきわけて、肩から日の丸を掛け、奉公袋を下げて、何度も頭を下げている出征兵士の姿を私に説明した。「日本男子はね、みんなああやって兵隊さんになるんだよ。榮ちゃんも大きくなったら……」。駅のドームは「バンザーイ、バンザーイ、バンザーイ」の声で渦巻き、母の声は掻き消された。その度に私は涙ぐみ、「あのお兄さんはカワイソウダァ…」と泣くので、母は私の口を手で塞ぎながらソーッと人の波を分けて外に出て、わが子の行く末を案じたという。

私は一九三〇年（昭和五年）、東京府豊玉郡野方町沼袋（現在地・東京都中野区野方二丁目）で生まれた。そこは陸軍のラッパの音がいつも聞こえる住宅地である。当時、中野の北口には陸軍電信連隊があった。中野通り（現在の半分程の幅員だったが）の、現在サンプラザのT字路のところに正門があり、銃を持った十人程の衛兵が直立不動の姿勢で立っていた。朝夕、馬に乗った偉い将校さんが来ると、それはもう大変な勢いで大声を上げ、「捧げつつ」をした。ゆったりと敬礼を返す将校さんを見てこの人は偉いんだなぁと思ったが、「捧げつつ」をしていた兵隊さんは練兵場で、重い電線のリールを背負った兵隊さんを大声を上げて怒鳴ったり、ぶん殴って、ぶん殴って…、この人も偉いのかな…、あの叩かれている兵隊さんはそんなに悪い事をしたのかな…、でもあんなに叩かれるなんて…。私は、いつも「兵隊さんがかわいそうだ。兵隊さんなんか大嫌いだ」と言って泣いて母を心配させていたという。

陸軍電信連隊の練兵場は、現在の警視庁情報センターの敷地から西にむかって阿佐ケ谷のお伊勢の森までで、延々と草原が

続いていた。夏の夕方、子供達には格好のトンボとりの場所だった。しかし段々と高い鉄塔の数が多くなるにしたがって、中野は雷の名所になった。

小学校に入学した年に、盧溝橋事件が勃発し支那事変が始まった。その頃、いつの間にか陸軍電信連隊の門標は帝国陸軍憲兵学校に変わった。一般の兵卒は少なくなり、長靴を履いて長剣を下げて憲兵の腕章をまいた下士官の兵隊が多くなった。ある日、背広の人が私の家に慌ただしく飛び込んできて、「すみません。憲兵学校の兵隊です。逃げる練習なので隠してください」と言うや否や物置に入り込んだ。どうしたらいいのか分からなくて、家族は何も言わずに家の中に入り静かになってしまった。とっぷり日が暮れた頃、「ありがとうございました」と言ってどこかへと出ていった。「絶対、誰にも、何も言うんじゃないよ」と母は姉と私にきつい目をして言い付けた。そんな事が一年に二、三回あった。

昭和十五年は、紀元二六〇〇年の式典があった。東京駅から宮城（皇居の事を当時はこういって、市電が宮城の近くを通ると、車掌が「ただいま宮城前通過でございます」と言って、乗客に最敬礼を命じた）までの馬場先門は華々しい飾りがなされ、夜は提灯行列で賑わった。「紀元は二六〇〇年！ああ！一億の胸はなる」という歌は今でも忘れられない。

当時は皇紀と昭和で年号を呼称していたので、僕達は西暦は全く知らなかった。国民は臣民と、子供のことは小国民と呼ばれるようになり、この様にして国粋主義は一般に浸透していった。

大東亜戦争はじまる

昭和十六年十二月八日の朝、同居していた従兄弟（故佐藤弘二氏・当時早稲田大学建築学科在学中、卒業と同時に水戸工兵連隊に召集され、戦病死）が慌ただしく階段を駆け降りて来た。「死んじゃう！死んじゃう！」と言いながら…。ラジオをかけると、オルゴールが鳴り「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部発表。わが大日本帝国は西南太平洋に於いて、十二月八日未明、英米両国と戦闘状態に入れり」とアナウンスされ、勇ましく軍艦マーチが奏でられていた。

私はその時、成蹊学園初等科（現在成蹊小学校だが公立小学校が国民学校と改名された時と同時にこのように変えられた）四年生で、クラスは三〇人だった。学園では昔から、小学校から高等学校（旧制）までの生徒が、全員一堂に会して昼食を共にしていたが、その頃になると段々内容は質素なものとなり代用食が多くなってきた。十二月八日の食事は、コッペパンと大きなさつまいもが一個ずつだった。十二時から重大なニュースがあるので、全員前庭に集合する旨、先生から話があった。午前中の授業が早められて、大急ぎで食事をしたが、僕にはとて

も間に合わずに、ズボンのポケットにお芋を突っ込んで、前庭に走って集まった。前庭には小学校から高等学校までの全生徒が集まった。こんな事は滅多にない事だった。正装をした何人かの配属将校のうち、一番偉い大佐が壇上に上がって指揮をとった。僕たちは未だ小学生なので、配属将校の命令を受けたのは初めてだった。嬉しいような、悲しいような変な気持ちだった。

ラジオから、正午の時報が大きく聞こえ始めた。今から重大放送をするというアナウンスに続いて、聖戦の詔勅が読まれた。その間全員頭を下げてこの詔勅が終わるのが今か今かと待った。長い文章だったが僕にはよく判らなかった。それが終わると、東條英機の詔勅を排し奉りてという長い話があった。その話の後、報道（ニュースを当時こう呼んでいた）が始まり、ハワイ奇襲の大戦果、マレー沖でのプリンス・オブ・ウェールスをはじめとするイギリス艦隊せん滅等、大勝利のニュースが報道され、その度にワァッという喚声が上がった。教室に帰って先生から、「A・B・C・D包囲陣（A＝アメリカ、B＝イギリス、C＝支那、D＝オランダ）に対して日本は戦争を始めたのだ。これは大変な事だ」と話があった。

そして、その日から灯火管制が始まり、町は一斉に暗くなった。

空襲はじまる

昭和十七年四月十八日（その数年前に現在の家、新井二―四五―十八に引っ越した）突然、空襲警報が鳴った。警戒警報が鳴らずに空襲警報が鳴ったので、皆間違いだろうと思っていた。その時、僕の家の上を、真っ黒い双発の飛行機が低空で物凄く早く北から南に飛び過ぎていった。片方の翼にアメリカのマークが付いていたので、それから母と二人でおろおろしたのを思い出す。

これこそ、空母ホーネットから飛び立って、初めての日本本土爆撃をしたドゥリトル爆撃隊のB16爆撃機だったのである。

その頃は、未だ戦況は切迫していなかったのだが、この空襲を機会に東京は戦争の危機を感ずるようになってきた。

その第一は灯火管制の強化だった。夕方になると暗幕を閉め、電灯はワット数を低下させ、黒い布地の袋で巻き、それを三〇～四〇センチ垂らした。だから、電灯の下だけしか明るくない。町会の役員さん達が家々をまわり、「××さん！明かりが漏れてますよ！」と注意されるようになり、何回か注意を受けると警察に連れていかれるという噂が流れるようになった。食料などの配給は、町会から隣組を通して配られるようになった。野方小学校で毎週行われる竹槍の訓練の出欠は、ブラックリストの格好の資料作りだったらしい。町会の役員や在郷軍人たちが、この野方町会での人々の恐ろしい存在になってきた。

成蹊学園にも直接・間接に戦争の影響は響いてきたが、ある

日、全校生徒前庭に集合の命令が出た。小学生の僕らも、配属将校の抜刀の指揮の元に直立不動の姿勢をとらされた。校舎から土田校長先生（元警視総監、元防衛大学学長の土田氏のご尊父である）が肩から国旗を襷（たすき）掛けにした三人の高等学校の生徒と共に出てこられ壇上に上がられた。この三人の生徒に召集令状がきて出征する為の壮行会だという。当時小学生だった私に強い印象を与え、今でも生々しく記憶しているのが校長先生の壮行の辞である。

町の人々が出征する時の町会長の壮行の辞は、「日本男児として出征することはこの上ない光栄だ。お国のために命を懸けて働いて来てほしい。家族の事は心配するな」と言い、生きて帰るのは非国民だという事を、暗に見送りの人々の前で宣言し、万歳万歳と景気を煽りながら、国防婦人会と愛国婦人会の人々の旗の波に中野駅まで送られるのが余りにも当たり前の事であった。配属将校の抜刀に見守られた中の、土田校長先生の壮行の辞は全く違っていた。「君達はペンをもって国を守る為に今まで学んできた。どんな事があっても、そして何がなんでも必ず帰ってこい。そして、ここでまた勉強しようではないか」と言ってボロボロと涙を流され、決して拭おうともしなかった。生徒達のすすり泣きは、いつの間にかオイオイと泣く声に変わっていった。

昭和十九年（僕は成蹊高等学校尋常科一年生である）、都立は勿論、私立の中学生達の殆どは軍事工場に学徒動員されていたが、成蹊高等学校尋常科では、最高学年が体育館に設けられた三菱の軍事工場で仕事に従事し、その生徒を除いては学徒動員はされず、勉強だけをしていた。当時、英語教育が禁じられていたものの、僕らは相当高度な数学、英語、そして物理、化学を学んでいた。南の島々から玉砕のニュースが伝わり、戦局は切迫してきた。どこの家々も防空壕づくりが始まった。一般的には、庭先に畳一帖程の面積で深さ五、六尺の穴を掘り、材木を渡して、その上に掘り起こした土を被せたものであったが、畳を乗せると焼夷弾が直撃しても通さないとか、様々な説が伝わった。物も無くなった。特に軍事物資として、鉄、非鉄金属は献納しなければならなくなった。まず、お寺から鐘が無くなり、鐘に代わって石が鐘楼に釣られた（鐘楼建築の構造上の解決策である）。僕らの学校からも蒸気暖房のラジエーターが取り払われ、校庭に高く積まれ、そして持ち去られた。各家庭の貴金属も徴収される事になり、母達の指から指輪が外され、警察に届けなければならなくなった。

その様な状態だったから、民間に鉄筋などは勿論無かったのだろう。当時の建築雑誌（学会誌）の研究報告は「竹筋コンクリートに関する研究」が花形だった様だ（筆者の持つ当時の研究報告による）。

僕達の学校もコンクリートの本館は航空軍司令部に接収され、

当時その長である皇族の李王殿下や、軍人、軍属の男女で学内は賑わっていた。

ある日、今でもその日は忘れられない十一月一日の事である。学校にも防空壕づくりが始まった。我々のクラスは裏の松林に行って、既に上級生が切っておいてくれた四メートル程の松の丸太を二人でかついで七百メートル程離れた陸上競技場に運ぶ途中だった。構内の裏の畑に陣取った高射砲陣地の横を通っているとき、その高射砲が、物凄い音で一斉に火を噴いたのである。警戒警報も空襲警報も発せられていないのに……。みんな、松の丸太を放り出して逃げ出した。上空には、一筋の飛行機雲が伸び、その先端にピカッと銀色の小さなツブが一つ飛んでいた。それよりもずうっと低く後のほうに、沢山の高射砲の煙が炸裂していた。初めてのB29の空襲だったのである。たった一機ずつではあるが、それからほぼ毎日B29の偵察が始まった。

昭和十九年十二月三一日。真っ暗な大晦日だった。家族が無事を喜び、年越しを祝っている時、俄かに空襲警報のサイレンが鳴り響いた。B29一機が飛来したという。その年は凄く寒かった。十二時前だというのに防火用水には氷が厚く張っていた。鳶口でつついても叩いても割れなかったから、多分五、六センチの厚さがあったのだろう。その氷を隅から隅からまで割っておかないと、防火には使えない。間もなく、満天の星空に敵機を探し回っている何十本というサーチライトが、爆音と共に上空に近付いてくる。焼夷弾を落としたらしいが、中野かどうかは分からなかった。とにかく、大晦日も無事だったとホッとし、除夜の鐘の鳴らない新年を喜び、そして寝に就く。毎夜、頻繁に来る敵機に過敏になっていたその頃は、勿論、家族全員ゲートルこそ取るものの、ズボンを履いたまま寝ることが習慣になっていた。うとうととした夜中二時過ぎに、また空襲警報のサイレンが鳴り響いた。「また、おいでなさったよ」と手早くゲートルを巻く。数時間前に割って捨て去った防火用水には、もう氷が厚く張っていた。また、五、六センチに張っている厚い氷を鳶口で叩き割り、氷を外に掻き出す。濡れた手袋が手先に凍り付くようだ。また、爆音を追って何十本というサーチライトが夜空を明るくする。爆音。高射砲の音。「お年弾だ」と洒落を言っても家族は沈黙。

これを機会に、一機ずつのB29の空襲が毎夜続く。心理作戦に負けてたまるか。二月に入ると毎夜、何回かの空襲に見舞われるようになり、いつの間にかゲートルを巻いたまま寝るようになる。そして、寝間着の味はいつの間にか忘れていった。

三月十日、警戒警報のサイレンが鳴り渡る。「また、おいでなさったよ」と毎夜の来客の積もりで目を覚ますと、いつもとは変わっていた。空襲警報なしに、もう爆音が聞こえ、しかも聞き慣れた一機の音ではなく、沢山の爆音が夜空にこだましてい

た。跳び起きると、東の空が赤く染まっている。その赤い色に煙が掛かりはじめ、どんどん広がっていく。サーチライトは一本も見えないどころか、いつも高く飛んでいたB29は低く飛び、その機影は地上の火災の光で赤く輝いて見える。東からも、南からも入り交じりながら、低く飛び回って見える。B29は地上に向けて曳光弾を盛んに撃っている。「新宿だろうか?」「もっと遠いようだな」。しかし、燃え上がる炎、煙は間近に見え、ガソリンの匂いが鼻をつく。遠くの喧噪の渦が中野でも感じられる。「こりゃ、大変なことになった」。歯の根が合わないというのはこの事を言うのだろうか、歯がガタガタ止まらず、体の震えが止まらない。初めての大空襲だった。遠くの喧噪の渦の中で、鈍く唸っていたB29の爆音はいつの間にか無くなっていた。まんじりとも出来ず、家族は暗幕に囲まれた暗い電気の下で輪になって、ただ無言だった。そして、下町だとすると、千住のだれそれは、そしてどこそこのだれそれは大丈夫だろうか、どうしているだろうかと誰言うとなしに案じ始めるなかで、夜が明け始めた。東の空は煙に覆われていた。表現出来ない、初めて見る太陽がその中に昇ってきた。

黒い太陽。私に初めて見せた暗黒の太陽。それは無防備な市民の死を照らす太陽だった。しかし、新聞は全く詳細を知らせなかった。